

## [研究ノート]

## 大乘仏教教義から見えてくる“関係性”を捉える

—ソーシャルワーク教育に教えてくれるもの—

戸塚法子\*

Key words : 般若経, 相依性, 慈悲業

## はじめに（本稿の目的と取り上げる範囲）

ソーシャルワークがその根底に据える「価値観」「人間観（対象者観）」をソーシャルワーク初学生に教授していく際、我々教師は迷うことなく欧米型の援助観、すなわちキリスト教的「価値観」「人間観（対象者観）」を根底に据えつつ、ソーシャルワーク教育全体の構成をつくりあげてきているといっても過言ではない。このことはさまざまな社会福祉士養成テキストで取り上げられているソーシャルワークの「価値観」「人間観（対象者観）」に関わる単元を調べても明らかである。

他方、福祉相談の現場では、深刻な生活状況下で悩み苦しんでいる子どもたち、その家族、高齢者、障がい者からの相談件数は減ることがないばかりか、日々その複雑さを増すばかりである。こうしたなか、キリスト教的「価値観」「人間観（対象者観）」に基づくソーシャルワーク援助の捉え方に加え、“別のアングル”からも見えてくる“捉え方”を加えて、より幅広くソーシャルワークの「価値観」「人間観（対象者観）」を学生に教授していくことはできないかと考えた。筆者はそのなかにあって、我が国に古くから浸透・定着してきている仏教、特にそのなかでも多くの人々の「救い（済度）」に関与してきている大乘仏教の仏教教義のなかに、ソーシャルワーク教育が今後取り込んでいかなければならない「価値観」「人間観（対象者観）」に関わる貴重なヒントが多く隠されているのではないかと捉えている。

以上の研究動機に基づきつつ、本稿では、大乘仏教がその根底に据えてきた教義のなかからソーシャルワークにつながる教義の特徴を見出ししていくとともに、原始仏教、釈迦の仏教とは異なる大乘仏教固有の援助（済度）に対する認識のしかた、さらには相手（衆生）と向き合う際の根底を形成するものが、ここ最近ソーシャルワークにおいて着目されているホリスティックな援助観とも重なり合えるのかも含め考察していく。

---

\* 淑徳大学総合福祉学部教授

## I 大乘仏教について（その経緯と特徴）

従来より仏教にはいくつかの流れ（流派）があると言われてきて久しい。その一つに仏教自体の起源（根源）である釈迦による仏教がある。釈迦による仏教は出家を基本としており、特別な修行が求められる（修行に専念するため無職無収入が基本）。二つ目には、スリランカ、タイ、カンボジア、ミャンマー、ラオス等で信仰し続けられている上座部仏教（小乗仏教という呼称があるが大乘仏教側からの貶称と言う説有り）がある。そして三つ目がそこから約5百年ほど後に誕生した新しいかたちの仏教として興ってきた大乘仏教である。

大乘仏教は東アジアを中心に信仰され続けている仏教になる。大乘仏教の教義は釈迦の仏教教義とは異なる教義とされており、佐々木曰く「すべては修行者たちの宗教体験をベースに生み出されたもの」であり「修行するなかで『これこそがブッタの伝えたかったことのはずだ。私は仏教の正しい有り方を体験した』というインスピレーションやひらめきがあったからこそ、信念を持って『お釈迦様の本当の教えはこれである』と主張した」と指摘している。また佐々木は「大乘的な教義については、部派グループのどこか一カ所から誕生したというわけではなく、いろいろな場所で多発的に生まれた」のであり「地域ごと、時代ごとに様々な新式の仏教が生み出され、そうした小さな流れが一つになり、やがて振り返ってみれば、それは大乘仏教という大きな潮流になっていた」と指摘する（佐々木 2017：31-32）。そして釈迦の仏教において、“現世にブツダ（最高の存在）は一人”と捉えられているのに対し、大乘仏教では“ブツダは一人ではなく、在家にあって悟りの修行を積むことによってもブツダの一人になれる”と、まさに画期的な新しい“道”を拓いていった。

## II 大乘仏教教義から見えてくる独自の“救済（済度）観”

“誰かに助力する”その“ありかた”は、古今東西を問わずソーシャルワーク援助の基盤となる重要な部分に相当する。これまで筆者は拙稿のなかでそうした“援助観”をテーマとする考察をいくたびかおこなってきた<sup>1)</sup>。仏教教義において、この“誰かに助力する”うえでの“ありかた”をある意味象徴するものとして“利他”という救済（済度）観がある。

まず、釈迦の仏教における利他の捉え方は「自利をベースにした利他（よき手本となって皆を導き、最終的に自分が成仏するという自利のための利他）」を指している。さらに釈迦の仏教による場合、“悪い行為”は業（ごう：次の生まれ変わりへと引き寄せる力）につながり、「六道」<sup>2)</sup>のなかであるひとつの命を終え、またそのなかの何かに生まれ変わり、そして生と死の転変をひたすら繰り返していくと捉えられている（佐々木 2017：53）。その「輪廻」を断ち切るには、ひたすら瞑想修行に励み、業の力を弱め・消し去り、輪廻を最終的に立ち切ることが志向されていった。また諸々の衆生は「五蘊」<sup>3)</sup>を構成している基本要素が相互に関連し合い、要素間の因果則、

業の因果則に準じてかたちづくられていくと捉えられている。したがって釈迦の仏教においては、輪廻の概念はあるものの、“神秘的とされるような要素”はほとんど存在していないとされる。まさに釈迦の仏教は、佐々木が指摘するように「心の苦悩を自分の力で消したい人には論理的、理性的ではほ完ぺきな宗教」とされた。

一方、大乘仏教における利他の考え方は、「自分を犠牲にして誰かを救うこと（日常生活において利他の気持ちで周りを助けていく善行）」、すなわち「自己犠牲の利他」（佐々木 2017：42）を目指している。そしてのちに“日常の善行”はこれに匹敵する別の行為、例えばブッダを崇め、供養する諸々の行い（善行）等によって置き換えても“可能”と解釈されていく。いずれにせよ大乘仏教の場合は、利他の気持ちを持って諸々の善行を積むことがブッダに至る“修行”と捉えられていった。また「大乘経典は、それ以前に民衆の間で愛好されていた仏教説話に準拠したり、仏伝から取材をしたりしながら、その奥に哲学的意義を内包させつつ、さらに一般民衆の好みに合うように制作されていった宗教的文芸作品」とも言われている（中村 2002：59）。こうして大乘仏教では、最初から民衆に寄り添うかたちで救済（済度）が捉えられていった。また佐々木は、数ある大乘経典で最古のものである『般若経（多種有るなかで基本とされ教義はほぼ共通）』で注目すべきこととして、「『本来は輪廻を繰り返すことにしか役立たないはずの業のエネルギーを、悟りを開いてブッダになり、涅槃を実現するために転用することができる』ととらえ直した点」に着目する（佐々木 2017：55）。大乘仏教ではこれを「回向（業のエネルギーを輪廻とは別の方向に向けること）」と呼んでいる。大乘仏教がその後、無量無数無辺の衆生のなかへ急速に広まっていったことを考え合わせると、釈迦の仏教では救われない人、そこから漏れ出ていってしまう人への執着と、彼らの存在（実態）が示す大きさへの着眼は、ソーシャルワーク援助のなかで寄り添い続けていかなければならない人々ともどこか重なるところがあるように思われる。

また、『般若経』では「この世は因果則を越えた、もっと超越的な法則によって動いている」とし、釈迦の仏教でいうところの輪廻を生み出す業の力を断ち切る“出家を前提とした修行”ではなく、それがかなわない多くの人々の苦難に向き合うにも、在家にありながら救いの道を歩めるようにした。まさに日常生活のなかにあって正しく生きていくこと、日常の善行、見返りを求めずに人と接し、自分を戒める姿勢と慈悲の心を持ち、自分を常に第三者の目で冷静に見つめること等を“ブッダに至る悟りのエネルギー”に転用させ、在家にありながらもブッダへの道を歩むことができるとしていったのである。さらに、何か不思議で超越的な力がこの世に存在し、実際には無理だろうけれどもなんとかこうならないか、という夢や希望がもてるような神秘の力が『般若経』のなかに潜んでいた。そのことで新たに救われる人が出てきたことは、まさに注目すべきことである（佐々木 2017：70-72）。このことは、釈迦の仏教という枠から漏れ出てしまう衆生を済度するために、釈迦の仏教が構築する世界観を無化し、「空」という概念をつくりかえることにつながっていく（佐々木 2017：64）。

以上からも、釈迦の仏教でいう“修行によって涅槃にたどりつく（悟りを開く、輪廻を止める）”

ことと、大乘仏教でいう“日常における善行”は、“異なる行為”として位置づけられた。

### Ⅲ “慈悲業”を支えている独特な教義：諸法を包括する「縁起」とそれとつながり合う諸概念

前項までをふまえつつ、実践としての“慈悲業”を捉えていく際、まずは前提とすべき重要な概念を理解する必要がある。それが、縁起、無自性、空、の3つである。このなかで全体を包括しているのが縁起の概念になる。縁起は、大乘仏教における重要教義であり、これを理解する際、我々はナーガールジュナ（漢訳：龍樹）の『中論』から紐解くが必要になる。ナーガールジュナは初期大乘仏教の僧侶であり、大乘仏教に理論的・哲学的基礎を与え、その後の思想的展開に大きく貢献をした人物である。その代表的著作である『中論（原著）』は、膨大な詩句から構成されており、詳細な注釈なくしてはその理解が難しい<sup>4)</sup>。したがって本稿では、ナーガールジュナの原意に最も近いと評価されているチャンドラーキールティー（ブッタパーリタの弟子）による注釈書『プラサンナパダー』の和訳版である奥住毅『中論注釈書の研究』、および『プラサンナパダー』を忠実にかつ一般向けにかみ砕いた注釈書である中村元の『龍樹』、この二つを参照しつつ考察を進めていくことにしたい<sup>5)</sup>。

中村は、『中論』全体が縁起を説いているといっているのでは」と言及しつつ、チャンドラーキールティーの注釈書によって『中論』独自の縁起説が注目されるようになったと指摘している（中村 2002：162）。

中村によれば、縁起とは“相依していること（relationality）”であり、チャンドラーキールティーの注釈に基づき、“相因待”，“相依性”を指すとしている。別の表現としては「甲によって乙があり、乙によって甲がある」また「これがあるとき、かれがあり、これが生ずることから、かれが生じ、これがないときかれなく、これが滅することから、かれが滅する」としている（仏教各派もこれを承認）。すなわち、「（縁起のもと）もろもろの事象が互いに相互依存または相互限定において成立していることを明らかにしようとするものであり、一つのものとは他のものとは互いに相関関係をなして存在……（中略）……もしもその相関関係を取り去るならば、何ら絶対的な、独立的なものを認めることはできない」としている（中村 2002：155-6）。故に縁起は、相互限定、相互依存の意味にほかならないとしている（中村 2002：238, 268-270）。もう少し踏み込むと、前者の相互限定は、二つ以上の連関あるものが一方から他のものに対して否定的にはたらくことであり、後者の相互依存は、一つのもものがそれ自身では成立しえないが故に他のものの力をまつものであり、それ自体のうちに否定的継起を蔵するものと注釈されている（中村 2002：240）。したがってこれら2つの意味合いを内包している縁起は、肯定的積極的に響くものの、否定を内に含めた概念とされている。

さらに「縁起せるが故に無自性であり（逆の説明は見出されない）」「無自性なるが故に空であ

る」と説明されている。縁起は常に理由であり、空は常に帰結である。中村は、縁起という概念から無自性が必然的に導き出され、さらに無自性という概念から空が必然的に導き出されると指摘。縁起→無自性→空という論理的な基礎づけの順序は定まっており、これを逆にすることはできないと言及する（中村 2002：241-242）。ここからすれば、日々の生活を迷いあぐねながらおくる我々のその姿、人間が迷っているそのもろもろのすがた、そこにおける現実の（リアルな）人間生活の解明と“空の実践としての慈悲業”は、大乘仏教教義にみられる独特な構造連関、固有の論理性を通じて、ひとつにつながっていくことになるのであろう。この研究はぜひ次の機会に譲りたい。

また中村はさらに、西洋近世哲学は自我の自覚に立ちつつ自我を追求していく運動の歴史であり、そこでの問題は常に主観と客観の対立であるのに対し、仏教は最初から主観と客観との対立を排除した立場に立ちつつ、「ありかた」として種々の法を説いていると指摘（中村 2002：268）。そのうえで重要なこととして、『中論』では主観と客観についてよりも「ありかた」の「ありかた」として、有と無の対立を根底的問題とみなしてきたことに言及している（中村 2002：268-269）。そこに流れる自然的存在としての「ありかた」から、各々が独立して存在することは不可能であり、互いに無関係ではありえず互いが他を予想して成立しており、両者は独立には存在しないこと。一切の法が、その“相依相関”のもとで成立しているとする（中村 2002：186）。そして、一切のものの関係は決して各自独存孤立ではなく相依相資であること、一切の事物は相互に限定し合う無限の相関関係をなして成立しているのであり、他のものと無関係な独立固定の実体を認めることはできずとし、相依性が説かれている（中村 2002：202）。中村は「原始仏教においては十二因縁<sup>6)</sup>のうち『前の項があるところには次の項がある』という意味であったが、後の中観派<sup>7)</sup>ではその関係をあらゆる事物のあいだに認めようとした。これが中観派では『長と短のごとき』論理的相関関係」と解するとされている（中村 2002：203）。したがって大乘仏教において諸法の関係性や、“慈悲業”を捉えていく際には、この捉え方が「大前提」となりもろもろの「(ものの)ありかた」が展開・成立していくことになる。それ故に、有（存在するもの）も無（存在しないもの）も成立はしない。そのみならず、有を説明しようとするならば必ず無という概念を必要としなければならず、有と無の対立はのがれることのできない宿命であり「有無は是れ衆見之根なり」とされる。有も無も独立には存在せず、互いに他を予想して成立している概念であり、有と無の対立の根底に、相互依存、相互限定を見出そうとした（中村 2002：269-270）。そしてこの構図のなかで相互限定、相互依存という意味での縁起のもと、有無を超越し、その対立を断ち切り、最も根源的なものとされる空、万物が成立する根拠とされる空が見えてくるのである。そして大乘仏教においては、諸法が互いに相依相互に限定する関係において成立している如実相を「諸法実相」とし、「縁起」と同義に捉え、不生不滅不一不異不常不断であると説かれている（中村 2002：282-3）。

以上、こうしたなかで実践としての“慈悲業”を捉えていく際、大乘仏教における縁起が指す

ものは、まさに法のあり方に関わるものであり、その法とは経験的事物（つくられたもの）ではなく、自然的存在を可能ならしめる「あり方」としての「もの」であり、もろもろの法は互いが相依って成立していると指摘されているのである（中村 2002：92）。

#### Ⅳ 大乘仏教教義から見えてくる“関係性”としての相依 — 結語にかえて —

今回は、大乘仏教教義の一端を把握するとともに、その教義は、これまで欧米型「価値観」「人間観（対象者観）」に編重してきた我々に、経験したことの無いような新しい指針を与えてくれたように思われる。何より万物はお互いを相依りながら成立させているのであり、もろもろの存在は全て互いに相依っているということ。そして自性は独立してはあり得ず、ものの「ありかた」の最終的根拠として空があるということ。これらは、従来ソーシャルワーク教育を通して自我機能の重要性を説き、実質的な問題（主訴）の解決に加えて援助の副産物としての自我機能の強化を目指してきたことを考えると、今回取り上げてきたような大乘仏教教義を、どう従来からのソーシャルワーク教育に取り込み、ホリスティックな援助援助スキームを創っていったら良いのか、さらにじっくりと追究していきたい。

#### 【注】

- 1) 戸塚は、ソーシャルワーク実践の根底にはそのソーシャルワーカーにとっての精神的な拠り所（援助基盤）が必ず有り、それが実践そのものにも大きく影響を及ぼすことになることを以下の拙著（本誌：総合福祉研究）において考察を行ってきた。
  - ・わが国の社会福祉領域で求められるべき「相談援助方法論」構築に向けて—日本型ソーシャルワーク構築に向けての基礎研究（Ⅰ）— 第19号, 2015.
  - ・“日本型ソーシャルワーク”に必要な要素としての“東洋的・日本的理解”を読み解く 第20号, 2016.
  - ・ソーシャルワークにおける「人と環境の相互作用」について—あらためてこの基本概念を問い直す— 第21号, 2017.
- 2) 「六道」とは、仏教において、衆生がその業を結果として「輪廻転生」を繰り返す6つの世界を指す。
- 3) 「五蘊」とは、仏教において、色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊の5つを指す。物質界、精神界の両面における一切の有意法を指す。
- 4) 『中論』注釈書としては、作者不明『無畏論』（チベット訳）、青目（ピンガラ？）『中論』（漢訳）、アサンガ『順中論義入大般若波羅蜜經初品入門』（漢訳）、ブッタパーリタ『ブッタパーリタ根本中〔論〕注釈書』（チベット訳）、バーヴァヴィヴェーカ『般若灯論釈』（チベット訳、漢訳）、スティラマティ『大乘中観釈論』（漢訳）、チャンドラキールティー『プラサンナパター』（サンスクリット本・チベット訳）の7つが主に今日まで伝えられているとされる。（奥住毅『中論注釈書の研究』〔チャンドラキールティー『プラサンナパター和訳』山喜房2014；改版初版より）
- 5) チャンドラキールティーは『プラサンナパター』によれば「縁起」という語を「縁りて」と「起こること」の二語に分解して考察することを戒めている（それぞれ独立の意味を有さない）。『中論（第1～

- 25章』が主張する縁起は、相依性（相互依存）のみの意味とされている（中村元『龍樹』講談社）。
- 6）十二因縁は、現実の人生の苦悩の根源を減する十二の系列化された条件のこと。
- 7）中間派は、ナガールジュナを祖師とし『中論』を基本典籍とする学派。縁起と空の思想を説く。縁起の考え方を徹底的に追究し、あらゆるものに適用していったとされる。

### 【引用・参考文献】

- 梶山雄一（2008）『梶山雄一著作集 中観と空 I』春秋社。
- 梶山雄一（2013）『梶山雄一著作集 仏教思想論』春秋社。
- 中村 元（2002）『龍樹』（講談社学術文庫）講談社。
- 中村 元（2010）『慈悲』（講談社学術文庫）講談社。
- 野村幸三（1985）『キリスト教の人間観 日本キリスト教人物史研究』新教出版社。
- 奥住 毅（2014）（改定増補）中論注釈書の研究 チャンドラーキールティアー『ブラサンナパダー』和訳 山喜房。
- 三枝充恵（訳注）（1991）『中論（中）—縁起・空・中の思想』第三文明社。
- 三枝充恵（訳注）（1991）『中論（下）—縁起・空・中の思想』第三文明社。
- 佐々木閑（2017）『集中講義 大乘仏教 こうしてブツダの教えは変容した』NHK出版。
- 佐々木閑（2014）『般若心経』NHK出版。